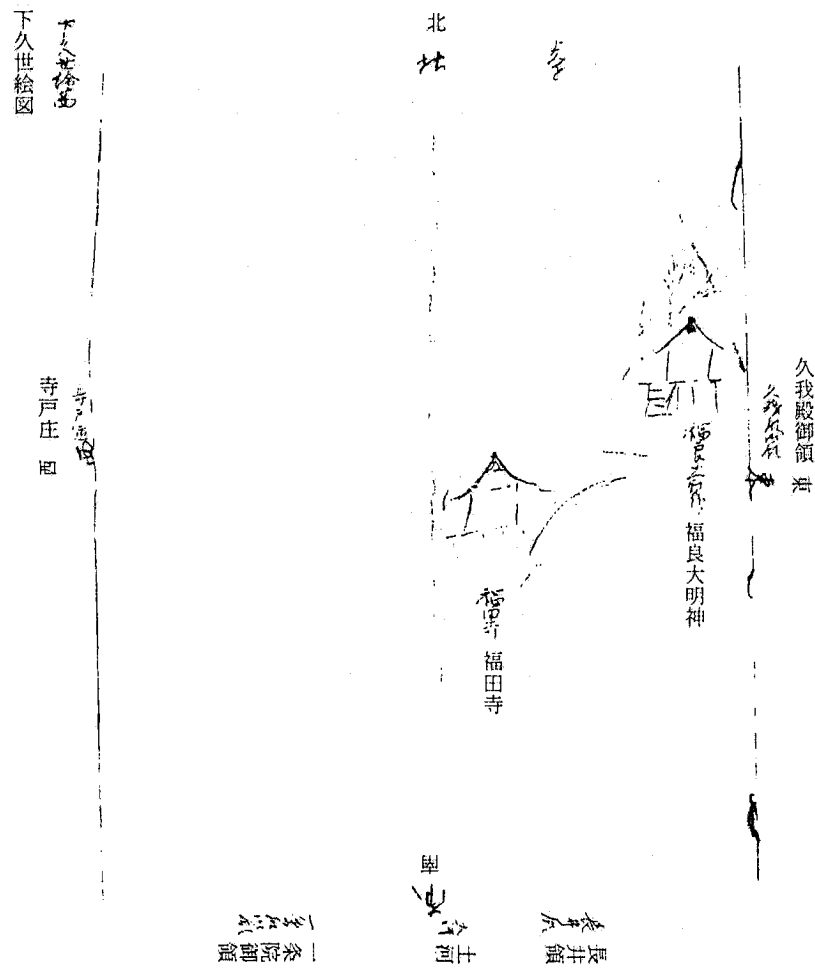


# 東土川遺跡・長岡京跡

## 現地説明会資料



山城国下久世庄絵図

(『桂川用水と西岡の村々』向日市文化資料館 1997年) から

1999年11月13日

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

## 東土川遺跡・長岡京跡の発掘調査

場所 京都市南区久世東土川町111 他

期間 1997年～継続中

調査主体 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

### 調査の経過

(財)京都市埋蔵文化財研究所では、京都市建設局水と緑環境部河川課から委託を受けて、洛西幹線用水路(西羽東師川)の改修に伴う発掘調査を、1980年9月から下流の伏見区菱川町<sup>ひしかわ</sup>から順次進めてきました。1997年からは南区久世東土川町内で、東土川遺跡・長岡京などに関係した発掘調査を行っています。雨水を貯め、西羽東師川に放出するポンプ場までが調査予定なので、発掘調査は最終段階になっています。

### 東土川町内の遺跡

関係する遺跡を時代順にあげると、次のようになります。

#### 1 一弥生時代から古墳時代の東土川遺跡

この遺跡は、昭和40年(1965)秋に地元の人が水田で溝を掘る作業中に、土器を数個発見<sup>1)</sup>したことに始まります。遺跡の発掘調査は、長岡京にこの地域が含まれることから、昭和55年から開始されました。最近では名神高速道路の桂川サービスエリア建設にあたって、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターにより大規模な調査が行われ、弥生時代、古墳時代、長岡京期、平安時代の遺構が多数発見されています。

この調査で発見された弥生時代の遺構は、一辺10m前後の方形に溝を巡らした墓や小区画の水田などですが、住居跡は見つかりませんでした。当時の村は、サービスエリア北側の工業団地内に推定されます。

#### 2 一長岡京関係遺跡

平城京・長岡京・平安京などは、南北の朱雀大路<sup>すざくおおじ</sup>を境に西側を右京、東側を左京と言いますが、今回調査している場所は、左京一条三坊十一・十二町にあたります。この調査では、東三坊坊間東小路<sup>ぼうかん</sup>(南北道路)の東西の側溝<sup>そっこう</sup>が発見され、その間隔は9.5mでした。この道路と交差する東西の道は、一条大路・一条条間南小路などが発見されています。

また、先の桂川サービスエリアの調査では、1町規模の大邸宅や多数の道路が発見され、高位高官の住宅跡ではと推定されています。

さらに、ここから350m西北で行ったポンプ場の建設にともなう調査では、古い川が発見され、木札に文字を書いた木簡<sup>もっかん</sup>が多数埋まっていた。木簡には、上流や下流から筏<sup>いかだ</sup>や船で集まる都を造る木材などの物資を、陸揚げしていたことが書かれていて、川港があったことがわかりました。

桂川上流の丹波からは、材木を筏に組みここまで流す。淀川下流の大阪市難波宮<sup>なにわのみや</sup>からは、筏や船<sup>じんりき</sup>を人力で桂川支流の古い川まで引き上げる。港に集まった物資は、都の工事現場まで車で運ぶ。大きな都市を造る過程での一連のにぎわいを想像できる遺跡が、1210年ほど前に存在しました。都が平安京に変わると役人の住宅地は再び開墾<sup>かいこん</sup>され、水田・畑などの耕作地となり、静かな地域となりました。

#### 3 一室町時代から江戸時代の遺跡

昨年度からの調査で発見された新しい遺跡です。東土川町内に戦国時代の「土川城」を考える人もいますが、調査では城に関する堀跡などは発見されていません。先に述べてきた時代の遺構は数が少ないのですが、室町時代後半の戦国時代から江戸時代の遺跡は、各調査地点で多数見つかっています。川・溝、建物、円形石組井戸・木組み井戸<sup>はしろうまな</sup>、柱穴などがあります。戦国時代には今の西羽東師川に平行して幅3mの川が流れていましたが、江戸時代初期になると竹の根株で川を埋めたことがわかります。この時代に村を東側に広げるための工事だと考えられます。

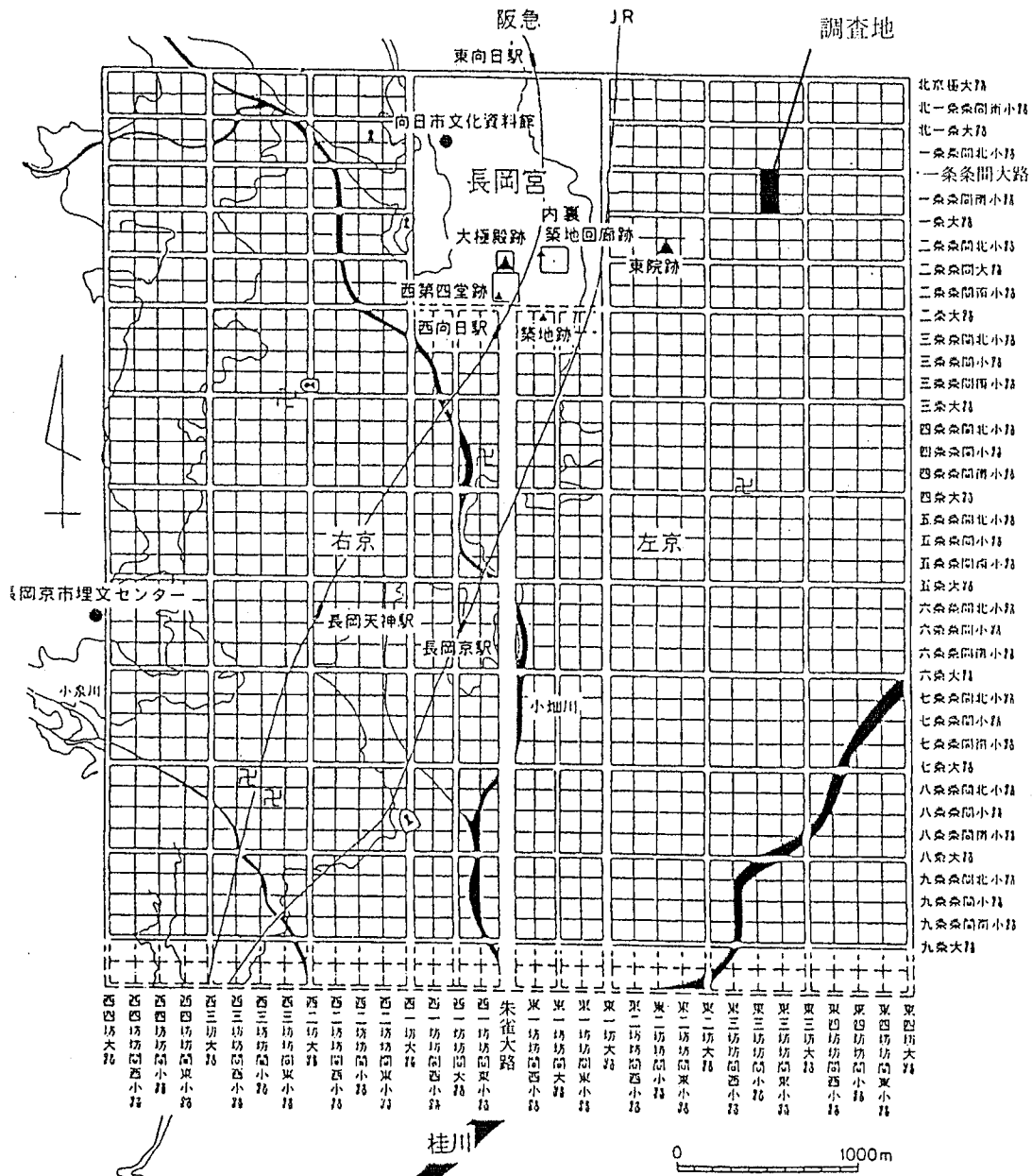
現地説明会の調査現場 戦国時代から江戸時代前期の遺構

以下、見ていただく遺構を簡単に紹介します。

今回見学していただく調査地点は、宅地であった部分です。調査は、旧宅地をまとめて行う計画でしたが、6月末の集中豪雨のために西羽束師川の護岸が一部崩れたため、西と東に分けて実施しました。見学地点は東側の部分です。戦後まで宅地の一角に池があったとのことですが、そのときの池も調査地の南で見つかっています。

現在は埋め戻している西側の調査地の南側では、室町時代の400基以上の柱穴を発見しています。柱が腐らずに残っていたものや、柱はすでに腐り、穴の底に敷いた石だけが残るものもありました。また、この北側では、東西方向の溝を発見しました。遺物から戦国時代の16世紀代中頃に掘られ、江戸時代前半に埋まっていることがわかりました。

また、南北方向に流れる2本の溝を発見しています。いずれも弥生時代中期の土器が出土し、桂川サーピスエリアと同じ、<sup>ほうけいしゅうこうぼ</sup>方形周溝墓の南東コーナー部を発見したものとみています。コーナー部の正立した土器には、別の土器を被せて蓋にした状態のものもありました。



長岡京の復元図と調査位置

東の調査では南北方向の溝を4本発見しています。南北方向のSD439は、明治時代以降に埋設しています。SD452は北の調査区から連続する規模の大きな溝ですが、まっすぐ南には延びていきません。この溝で壊されているSD456は「V」字型の断面をもつ溝で、南で東方向に傾き、調査区外へ延びています。両溝とも戦国時代の16世紀後半くらいに掘られ、SD452は江戸時代初頭には埋設しています。

南部では井戸を3基発見していますが、江戸時代のものが2基（SK442・449）、桃山時代くらいのもものが1基（SK454）あります。

出土した遺物

弥生時代の壺・甕<sup>つぼ かめ</sup>、古墳時代の須恵器杯・蓋<sup>つき ふた</sup>、長岡京期の須恵器杯、土師器皿・蓋<sup>すえき はじき</sup>などが出土していますが、完全なものは少なく破片が多い状態です。戦国時代の遺物には、各地で生産されたものが村内に持ち込まれて使われています。中国陶磁器、佐賀県伊万里焼<sup>いまりやき</sup>・唐津焼<sup>からつやき</sup>、岡山県備前焼<sup>びぜんやき</sup>、兵庫県丹波焼<sup>たんばやき</sup>、滋賀県信楽焼<sup>しがらきやき</sup>、愛知県瀬戸焼<sup>せとやき</sup>などで、茶碗、すり鉢、壺・甕などおおくの器形があります。

今年の7月には中橋（東口橋）から、「寛永四年十二月十五日」（1627）と書かれた花崗岩製の石材が発見されました。石材の半分は今も埋まっているので、これから取り出して調べる予定ですが、この年に橋を石橋に変えたか、川の位置を現在の場所に変えたことが予想されます。寛文6年（1666）には、倉掛神社が造られていますから、東土川村の整備が江戸時代前半に行われたことがわかります。

東土川は、平安時代後半から戦国時代までは複数の領主が支配する荘園であったと推定されますが、戦国時代の末になると山科区<sup>かじゅうじ</sup>の勧修寺の領地になったことがわかり、収穫高は419石と記されています。東口橋を石橋にすることや倉掛神社の造営は、戦の多い世の中から近世になり、村のまとまりが強まったことをみることができます。

1) 京都新聞 昭和40年（1965）11月1日付「山城地方にも弥生式文化？」

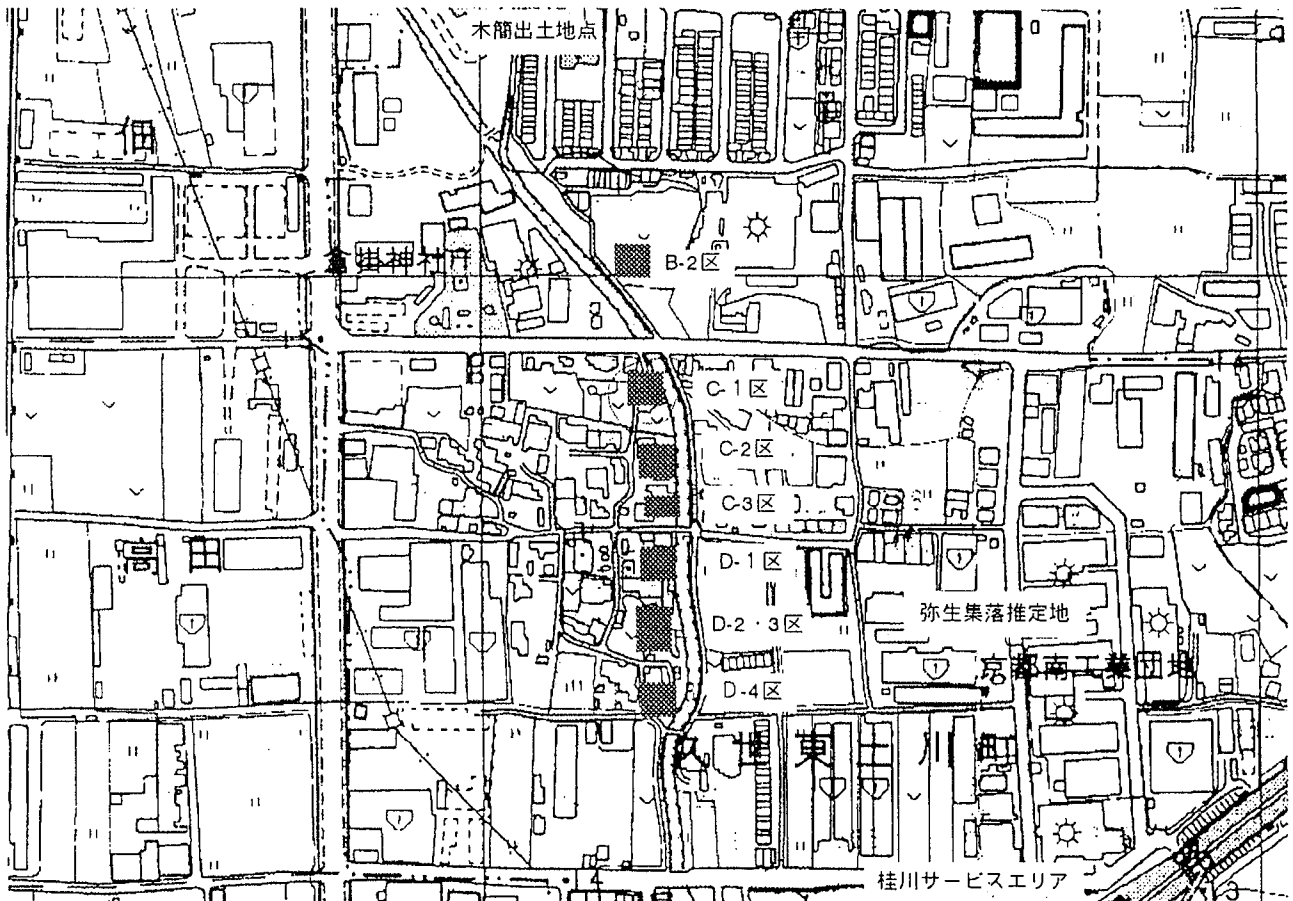
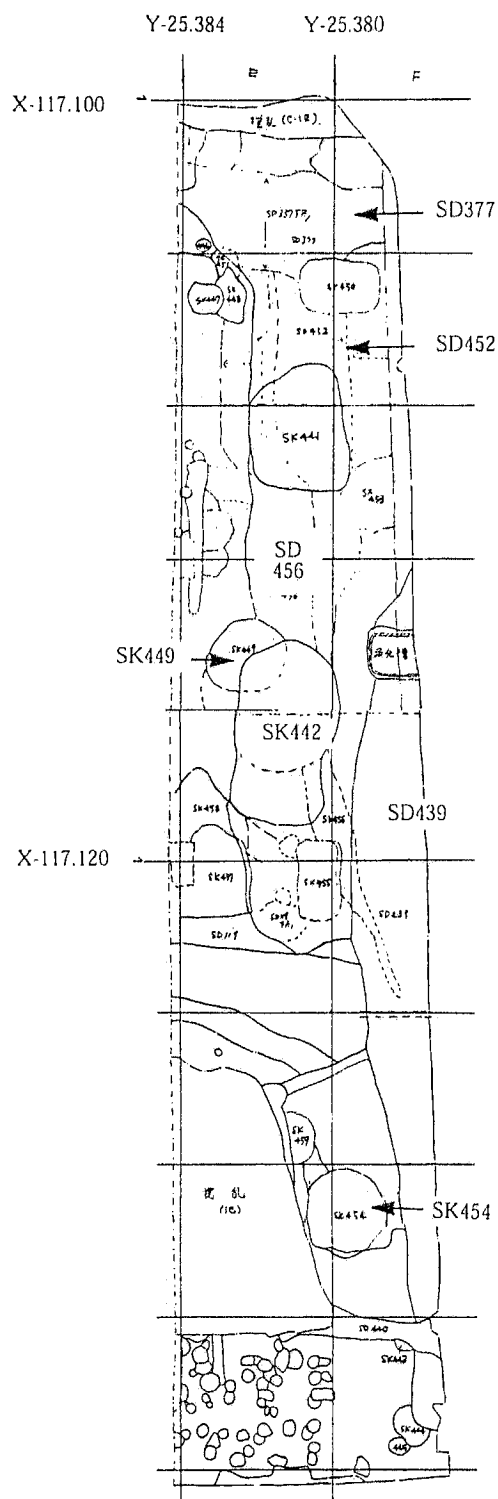


図1 調査位置図と周辺の遺跡 1 : 5000



C-2区の東部の遺構 (1 : 200)



写真1 C-1区南部全景（北から）

東側（左）には戦国時代から江戸時代初めの川が2本並行して流れ、西には井戸がある。川はここで流れを、北西方向から南北へ変えている。

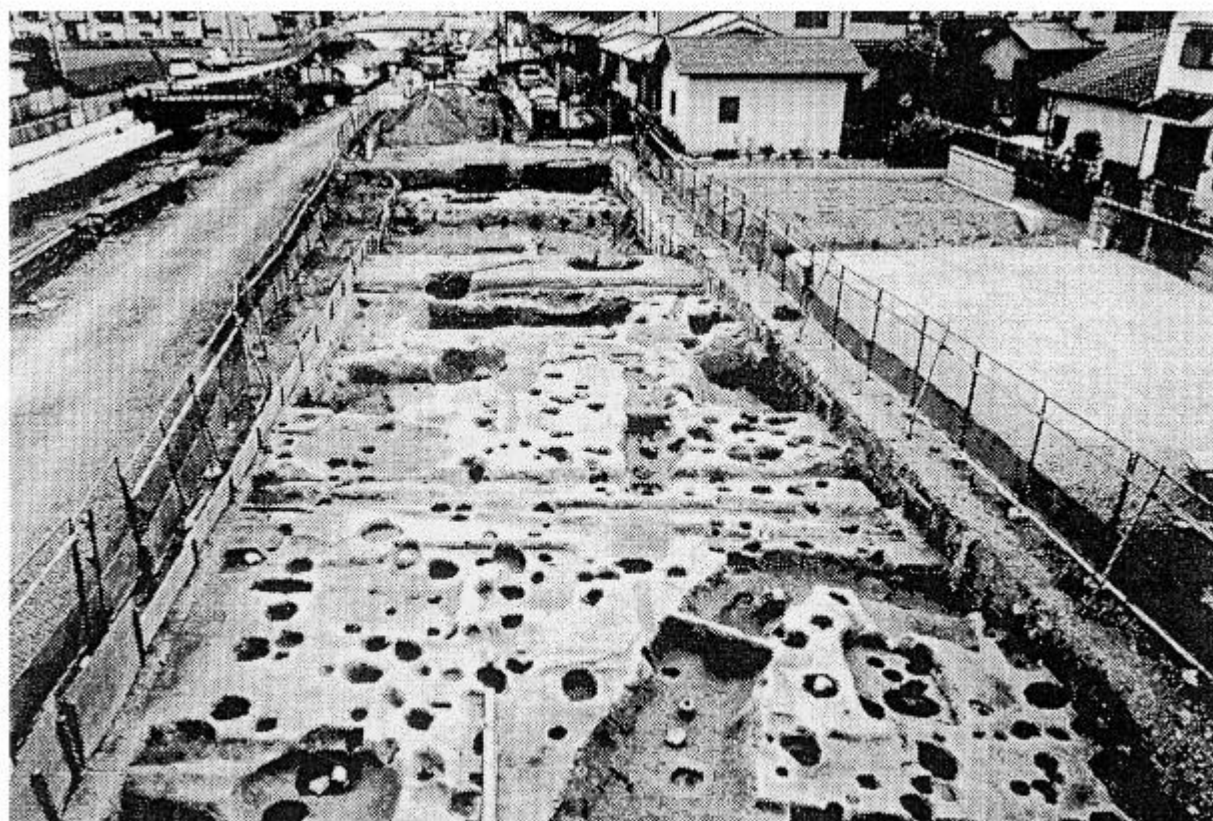


写真2 C-2区西部全景（北から）

北側（手前）には戦国時代の柱穴が多数ある。右側の斜め方向の溝は弥生時代の墓を囲むものである。奥の南に最近まであった池が見える。

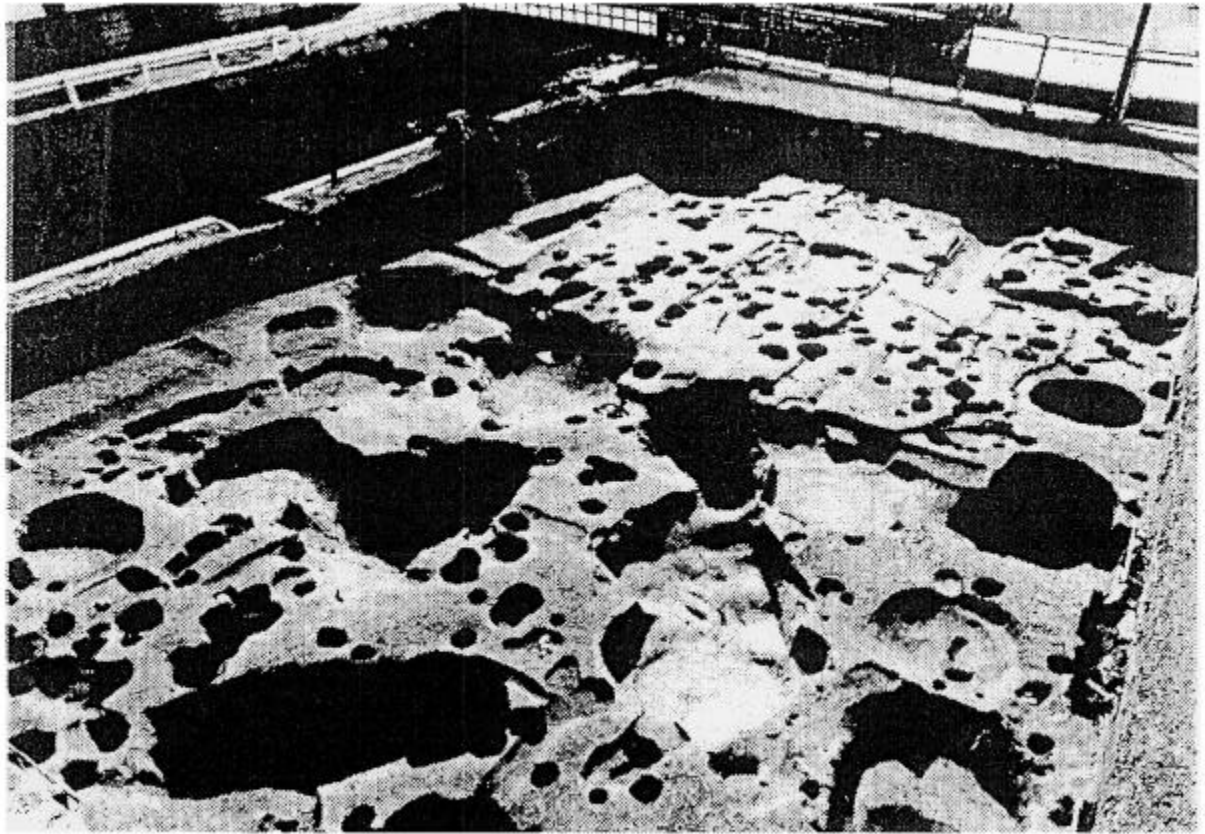


写真3 C-3区全景（北西から）

戦国時代の多数の柱穴が発見された。右側の大きな穴は石組みの井戸である。左端には北から続く溝の一部が見え、西羽東師川に平行していることがわかる。

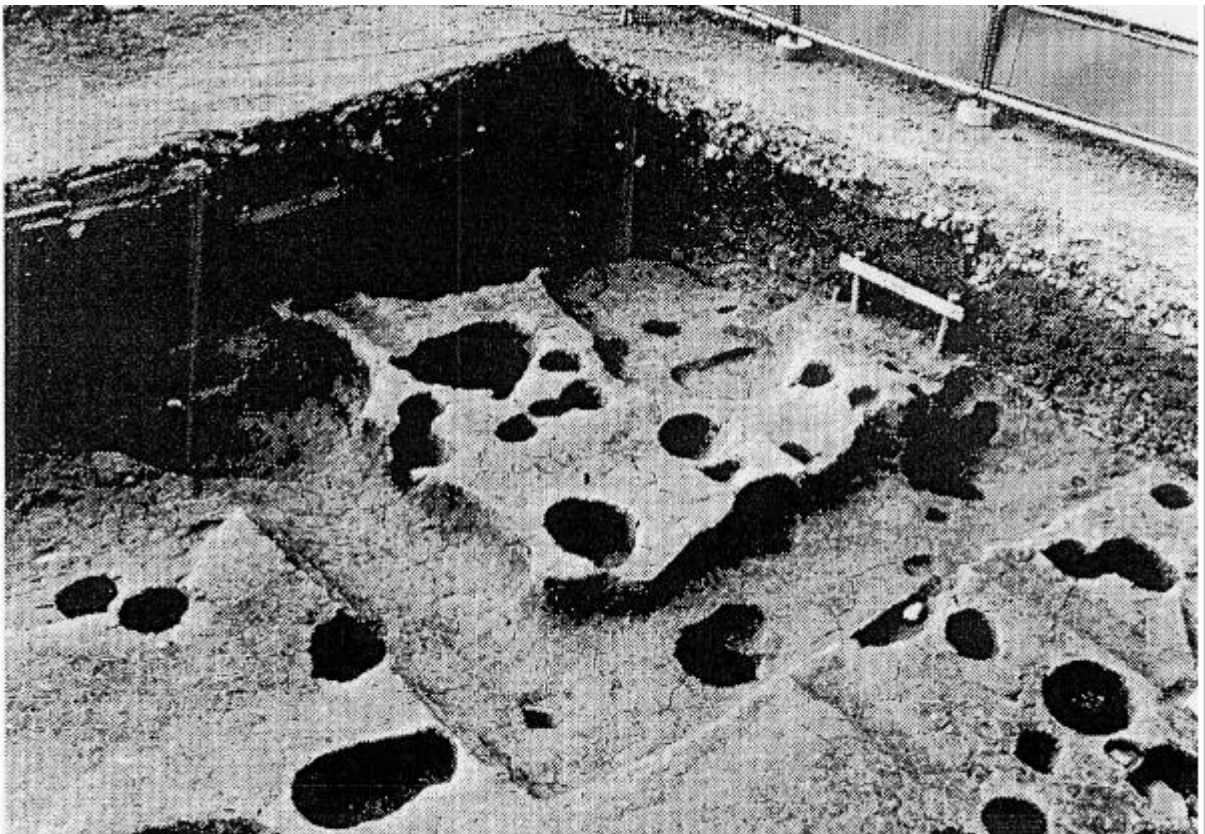


写真4 C-3区长岡京期の道路側溝（北東から）

南北道路と東西道路の交差点側溝。南西コーナー部の溝で、幅は1m前後ある。

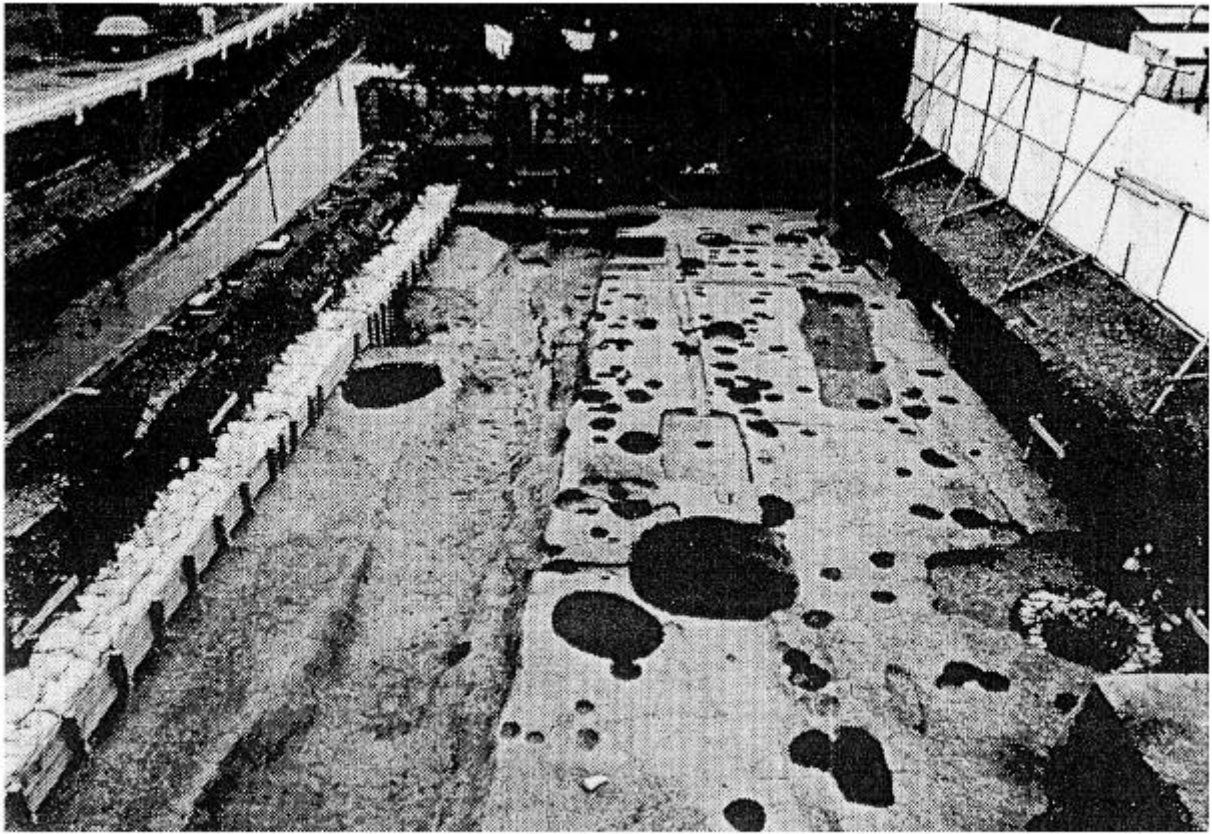


写真5 D-1区全景（北から）

東側（右）には北から続く戦国時代から江戸時代初めの川が流れる。西には井戸や柱穴があるが、北部の調査地点と比べると少なくなる。

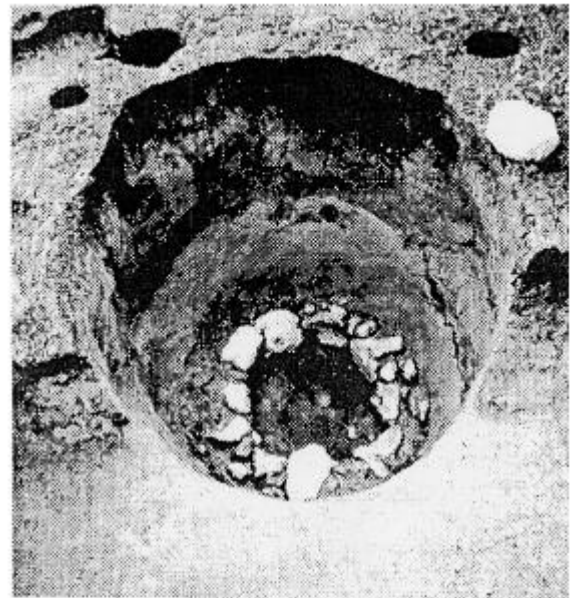


写真7 C-3区石組井戸（北から）

石を円形に積んだ井戸。上部の石は別の井戸に使ったためか抜かれ、存在しない。

写真6 D-4区水車設置場所の溝（北から）  
底に石を敷き、固めてある。記録から明治末年頃のものだと推定される。